
君に捧ぐ歌

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に捧ぐ歌

【Zコード】

N7392D

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

主人公の夢沢歌^{ゆめざわうた}は、夢はボーカルになること。夢をかなえるためにバンド専用の学校に入った。そして、初めての恋をしてしまう。でも、その相手は、見た目も性格もほとんど違う人……。

君に捧ぐ歌 1（前書き）

間違つた言葉や、間違つた字があるかもしれません。どうか、見てほしいです。

これはもしかしたらいきなり展開が速いなと思つたりするかもしれませんがどうぞ見てください。

君に捧ぐ歌

1、私の夢、それはボーカルになること。

この「バンドソング結成学校」はいつも歌を歌い放題の学校。でも、それは、とても難しいことでもある。

ただ歌つてるだけと思いがちだが、本当はとても大変。

バンドのことではとても厳しい。

種類は四つに分かれている。

ボーカル、ギター、ベース、ドラム。

この四つに分かれている。

私、
夢沢
歌。

私はボーカルになりたい。

私のお母さんもお父さんも有名なバンドの一員一枚のCDを100人ほど的人がその一枚のCDをあらそいぐらの有名で人気のバンドの一員。

お姉ちゃんもお兄ちゃんもねい。

私だけ違う。

私はこの学校に一年いる。

あとねい三年になることになる。

一年生のことは発声や、歌い方を習う。

一年生はいろんな歌を歌いながら練習していく。

そして、三年生は、バンドのメンバーを決める。

これがこの学校のおきてみたいなもの。

私はもう三年生になる。

今日はとても大事な日。

だつて、今日メンバーを決めるんだもの。

私には勝負の日なのだ。

おねがい、いいメンバーになりますよい。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、決まったのは……。

ギター かつこいいけどクールな男の矢箇 坂夜。

ベース 元気でなつっこいかわいい女の子の綾瀬 波。

ドラム お調子者でやせしこお兄さんタイプの男の人の葵 雄
途。

そして、ボーカルの私。

いいのか悪いのかよくわからない取り合わせ。

でも、決めてくれた審査の人たちほのぼうがいいと言った。

「じゃあ、めずらしく紹介しようつか?」

私は空氣を盛り上げるために言った。

「小学生じゃないんだから。」

坂夜がガムをくちゅくちゅと音を立てながらあきあきして言った。

私はちゅっとむかついた。

「じゃあさ、ニックネームつけない?」

波がにこっとしながら私に案を出した。

「それいいね。やねうよ。ね、歌ちやん。」

雄途もその案に賛成した。

「そうだね。それならいいかも。」

私も賛成した。

「坂夜はクールだから…。」

私は人差し指を「」にくつつけて考えた。

「クーは？」

波が元気よく手をあげて発表した。

「あ、いいね。じゃ、クーで決まり。」

私は人差し指を坂夜に向け、まるで刑事が犯人を指すみたいなくつに坂夜に言った。

「ふ、もつとましなのねえのかよ。ていうか人に指さすんじゃねえよ。」

坂夜は笑いながら言って、私の坂夜にむけた指をつかんでおろした。

（坂夜の手、冷たい。）

私の指をおろした後坂夜は学校を出て行ってしまった。

私はその後がちょっと気になってしまった。

「波は、「なー」でいいよー。」

波はまるで犬がしつぽふつてゐるかのようになんて言つた。

私はそれが人目で気に入つてしまつた。

「で、雄途は「ゆー」でいいんじゃない?」

雄途はちよつといやわつな顔をして苦笑いをした。

(思いつかいつかやわつな顔してのなー雄途)

「別にみんな伸ばすよつたー! クネームじやなべてもいいいんじゃない…?」

私は雄途を助けるために波を止めよつとした。

そのとれ、波は雄途に田をいつのいつわせながら田をむけた。

「うそ…。 もうこころ、「ゆー」で。」

雄途は苦笑いであきらめながら言つた。

(ある意味この子怖いなー。)

私はその光景を見てちよつと泣いて思つた。

「歌うやんは歌うやんでいいかも。」

なーは私を見ながら言った。

「どうして？」

私はなーに首をまげながらじゅうと寂しげに言った。

「歌ちやんはあんまりないんだよ。」

なーは何か悩みながら私に言った。

（ちよつとショックなんですか…。）

私はなーの言葉を聞いたときやつ思つた。

「ねえ。」

いきなり雄途が私となーに話し始めた。

「わざわざ一ヶクネームなんつけないでいいんじゃない？」

雄途はちよつとつむこでぼやけやつと言った。

「『え？』」

私となーは一緒にそろつて雄途に聞いた。

「だから、別に一ヶクネームなんていらないじゃないの？って。普通に名前で呼べばいいんじ

やない？坂夜は坂夜。波は波で、俺は雄途。歌は歌。でいいんじや

ない？ってこと。

雄途はちよつと寂しげに言つていた。

「私も……そう思った。聞いてて。

私は波にもうしづけなせりて、

波は笑いながら私に言つてくれた。

多分私をかばってくれたんだと思つ。

「じゃあ、みんなの下の机前のほうへ来て」と、

波は空気を変えてくれた。

(波つてすごい)

私はそれをみながらそう思つた。

「坂夜も帰つたちやつたし、練習は明日つてことで。じゃあねー！」

!

波はベースギターを小さい体でかつぎながら笑顔で帰つて行つた。

「じゃあ、私達も帰ろうか？」

私は笑顔で雄途に言つた。

「ああ。」

雄途はバチをバチ専用の袋に入れて、スクールバッグに入れた。

「その袋、置いたの？」

私はバチ専用の袋を見て雄途に首をかしげながら聞いた。

「ああ、これは、自分で作ったの。ミシンでねって。」

雄途はバチ袋を見せながらちゅうと自慢げに笑顔で言った。

「すごい。超器用じやん！！私全然作れないよ。しかも缶バッヂとかカッコいい！！！きやー。他にも何か作れるの？」

私はしゃぎながら聞き返した。

うん、手提げとか、携帯ケース（布の）マフラーとか編めるよ。」

雄途は私に優しく笑いながら言つた。

—すこい！

私は思わず大きな声で言つてしまつた。

「何か作つてあげようか?」

雄途は私の顔をみながら言つてくれた。

「え？ 本当？」

私はすつしょく喜びながら言った。

「うん。 何を作つてほしい？」

雄途は私に笑顔で言つてくれた。

「うーん、あ、肩からさげるカバンちょっとおつきめの。」

私はちょっとゼスチャー的に手を動かしながら雄途に言った。

「つまりショルダーツーこと？」

雄途はゼスチャー的な動きをみてクスクス笑いながら聞き返してきた。

「うん。 いっぱい物が入るショルダー。」

私は雄途に笑顔で言つた。

「わかつた。 缶バッヂは付ける？」

いつもしていろんな話で盛り上がつた。

その時間はとても楽しくてかけがえのない時間となつた。

2、坂夜[：]。

そして、乗り換えの駅についた。

そのとき…。

(ん? あれって坂夜?)

駅にいたのは女人の人といふ坂夜。

その光景はいかにも恋人同士つて感じで、とても楽しそうだった。

なぜか遠う存在に思えてしうがない。

なんでだろ?!

私は坂夜と女人の人何を話しているのか気になつて、隠れながら坂夜と女人人に近づいてみた。

「今日は何したの?」

ちよつと高い声、多分女人の人だと思う。

「今日はバンドのメンバーを決めた。結構変な奴等だつた。」

坂夜は笑いながら女人人に言った。

私はちよつとムカッとしながら聞いていた。

「へー。面白いことになつたらいいわね。」

女人はおしゃべりやかやう。

すゞい落ち着いてる声だから。

私と正反対。

私はいつまにか落ち込んでいた。

(何で私、落ち込んでんの?)

私はこのときは気づいてなかったの。

これは恋なんだよ。

君に捧ぐ歌 1（後書き）

どうでしたか？ちょっと続きが気になるなって言う人はぜひ、見てほしいなと思っています。
また、月曜日くらいにだすので見てください。

君に捧ぐ歌第一部（前書き）

文字の変換がちがつてたり言葉があてはまつてないかもしません
がぜひ、楽しんでみてほしいと思います。

3、何なの？この気持ち……。

私は坂夜と綺麗な女の人の会話を聞くだけだつた。

どうしてか、坂夜がとても遠くなつていいくつもいな気がする。

そのとおり。

電車が発射しそうになつた。

「ヤバッ！！」

私は思わず大きい声で語ってしまった。

そのとおり、坂夜に気がかりでしまった。

お前何してんの? こんなところで

坂夜はひっくりした顔で私に恐る恐る聞いてきた。

「え、か、帰りの電車これだから。」

私は電車を指を指しながら坂夜に言った。

「へー。 そつなんだ。 あ、 紹介してやるよ。 俺の幼馴染の彩音崎百合香。」

坂夜は横にいる女人の人を紹介してくれた。

「え？ 幼馴染？ 彼女じゃなくて？」

私は思わず動いてしまった口をふさいだ。

「私達ってそんなに恋人同士に見えるの？」

女人の人気がちょっと困った顔をしながら私に聞いてきた。

「話してる様子を見ていると結構恋人同士に見えますよ。」

私は女人人に言った。

「…。」

坂夜はちょっと黙った。

(苦しそうな顔、 どう考えたって百合香さんのこと好きでしょ。)

私は黙っている坂夜を見ながらそつ思つた。

心が苦しくてとても悲しくて。

なんだか「」の気持ち。

「「」あなたなの？」坂夜。」

百合香さんは私を見ながら坂夜に聞いた。

「ああ、俺のバンドメンバーのボーカルをやる夢沢 歌。」

坂夜は私のことを見ながら百合香さんに紹介した。

「歌ちゃん？ 可愛い名前ねー。しかもボーカル担当なんてすげいば
っちりじゃない。」

百合香さんは手を吊きながら少しだけ言つた。

「あ、ありがとうございます。」

私はちょっと照れながら言つた。

「敬語なんてしなくていいのよ。普通にお友だちになつましょ。」

百合香さんは優しく微笑みながら私に言つてくれた。

「はあ。」

私はちょっとつむきながら言つた。

「あのー、お取り込み中失礼ですか。はやく電車に乗らないと…。」

坂夜は私と百合香さんが話している途中に知らせてきた。

『あー…………』

私と百合香さんは大きい声で言つた。

私と百合香さんは坂夜はいそいで走りながら、ギリギリで電車に乗り込んだ。

「坂夜、もうちょっとせやく知らせてよ。」

百合香さんは息を切らしながら坂夜に言つた。

「わりいわりい、だつて長く話してゐから入り込めなかつたんだよ。」

「

坂夜は百合香さんなだめるように言つた。

「もう！足が痛くなつたわ。」

百合香さんは足をわすつながら痛そうに怒りながら言つた。

「じめんつて。」

坂夜は百合香さんに頭をかきながら言つた。

そのシーンを見ていたら、私はとても入り込める隙間がないことを改めて知つた。

そのシーンは私の頭をずっとかけめぐる。

うれしかつた坂夜と楽しそうな百合香を心に「ズキッ」とついた。

それからたものは痛くてズキズキしてとても苦しい。

「んなのはじめで。

どうして? ! ! 。

そして、私の降りる駅についた。

私は何もなかつたかのような顔をしてさよなりをした。

どうしてかつて? 決まつてゐる本当の「」と坂夜や百合香をいたされたくないから。

「今度お茶しましょうね。」

百合香さんはきれいな顔でニッコリと微笑みながら私を誘つてくれた。

「はい、ありがとうございます。」

私は百合香さんに笑いながら言った。

「また明日なー。」

坂夜はガムをくちやくちや音をたてながら私にむかつて手をふつた。

「うふ。」

私は元気よく返事をして手をふった。

「プシュー——。ガシャン。」

電車のドアが閉まつた。

そして、私はその電車を最後まで見守つていた。

坂夜と田舎番さんの笑顔を見ながら。

ちょっとだけ冷たい風が髪と頬をなでる。

4、 それぞれの思い。

翌日……。

私はいつものように学校にひづく。

そして、それぞれの小さいバンドの部室があるとして、私の部室は213号室。

ガチャツ

部屋のドアを開けた。

そしたら、波だけがいた。

「おっはーー！歌。」

波は元気に私にあいさつをしてくれた。

「おはよ。」

私は波に笑顔で言つた。

じー。

「何？」

私は波の目の視線を感じ波に聞いた。

「何か悩んでるね。その顔。」

波はニヤツとしながら私の顔を見ながら言つた。

「どうしてわかつたの？ーー！」

私は昨日のことを見ながらすつと考へ込んでいた。

「顔でわかる。ちょっとだけ元氣がないのがわかる。」

波はベースギターをみがきながら語った。

「悩んでるなら聞くけど?」

波は私に微笑みながら語ってくれた。

「あのね。昨日ね……だったの。どうゆう?」

私は昨日のことを波に真剣に話した。

「うう、あははははははははは。笑いすぎてお腹痛い。」

波はいきなり笑い出した。

「どうして笑うの?」

私は波に怒りながら語った。

「恋の一つも知らないの?」

波は笑いながら私に語ってきた。

「恋?……」

私は思わず大声で語ってしまった。

「あのね。それは恋。この人といふと心臓がドキドキしちゃうとか。彼女がいたときに苦しくなっちゃうとか、みんな恋なの。わかつた?」

波は私の顔を覗き込みながら血塊子に言った。

「う、うん。」

私はちょっとびっくりした顔をしながら言った。

それもそのはず私恋なんて生まれて初めてだもの。

「波は誰か好きな人とかいないの？」

私は波に思い切って聞いてみた。

「あたし? あたしはいるよ。」

波はちょっとびっくりしながら言った。

「でもかなわない恋だから。」

波は苦しそうに私に言った。

「どうして?」

私は波に聞き返した。

「どうしても、絶対教えないからね。」

波は私が「何で」という前に言った。

「…。」

私は黙つた。

そのとき、ガチャツ：

ドアが開いて入ってきたのは雄途だった。

卷之二

雄途は一コツとしながら私と波にあいさつをした。

- ୧୮୫ -

私は普通にあいさつを返して。

「おつはー。」

渡はぢゅうじねむじるいあにせつをした。

一
歌、昨日これ作った。

雄途は微笑みながら私に差し出したものそれは、ショルダーバックしかも今、人気のバンドのメンバーの顔の缶バッヂがついている。

布は黒色のきじで所々に白色の糸で星形に刺繡されている。

私のいかにも好きになるようなショルダーバック。

「先せ一。かひじ二一。」

私はとても気に入ってしまった。

「気に入ってくれて満足満足。」

雄途は私の喜びの顔をながめながら笑った。

「ありがとう大事に使うね。」

私は雄途にお礼を言つてからボロッチャイカバンから入っていた物を全部だして、雄途にもらつたかつこいレショルダーバックに全部入れ直した。

「歌、あなた怖い女になるよ。きっと。」

波はニヤけながら私の耳元でボソッと言つた。

「どういう意味？」

私は首をかしげながら波に言つた。

「いざれわかるよ。」

波はそういうて、またベースギターをみがきに戻つた。

「？」

私は首をかしげて声の調子を整えようと思つた。

自動販売機に飲み物を買いにいひとしたときこきなりドアが開いた。

そして、勢いよく入ってきたのは坂夜。

「こきなつじうしたんだよ。坂夜。」

雄途は坂夜に聞いた。

「はあ、はあ、はあ、ごめん、今はちょっと。」

坂夜は部室のソファに座った。

何か苦しそうに考える坂夜。

そんな坂夜を見ていると今まで苦しくなってきた。

私はとりあえず自動販売機に向かった。

そして、飲み物を私の分と坂夜の分を買って部室に向かった。

そして、なぜか部室のドアの前に雄途が立っていた。

「あれ？ 雄途じうしたの？」

私はボーッと立っていた雄途に聞いた。

「や、何か波が坂夜と話したいことがあるって言つから出してくれって言われてさ。」

雄途はちょっと聞き耳をたてながら私に言った。

「なんだうつ?」

私はドアに耳をあてて聞き耳をたてた。

『あたし、何のためにこの学校に入ったか坂夜は知らないよね。』

部屋から波の声が聞こえる。

その声はなんとなく真剣な空気が感じられる。

『……。』

坂夜何も話そつとしない見たい。

『あたし、あんたを追いかけてここまできたんだ。つまり、あたしはあんたが好きってこと。』

波は苦しそうに坂夜に言つた。

私はこの話を聞いて力がぬけて座り込んでしまつた。

『だから何があつたか知りたい。何があつたの?』

波は坂夜に聞いた。

その聞いてる声はほんのちよつと震えていた。

私はしらないうちに田から涙がこぼれ落ちていた。

カラソーッ。

私が持っていたジュース缶が私の手からこぼれ落ちた。

「どうしたんだよ？歌。」

雄途は私の腕をつかんでじょっとゆすりながら私に言った。

「ごめん、私…」

バツ…。

私の腕をつかんでいる雄途の手を振りほどいて学校から出て行つた。

「歌！！」

雄途の声が部室にも届いたみたいで部室から波と坂夜が出てきた。

「どうしたの？雄途。」

波は心配した顔をしながら雄途に聞いた。
「歌が学校から出て行っちゃった。」

雄途はびっくりした顔で波に言った。

カラソ…。

「ジュース…。」

坂夜は歌が買つてきたジュースを手にとりながらいきなり走りだした。

雄途は坂夜を呼んだ。

しかし、坂夜は戻つて来なかつた。

雄途と波はちらばつて歌を探すことにしてた。

坂夜は公園の「ベンチ」に座っている私に向かってきて、隣のベンチに座った。

「どうして、学校からここに来たんだ？」

坂夜は私に聞いてきた。

「 もへ、 こやなの。 えへして私がこんなに苦しへならなあや いけないのよ。 」

私は自分の思いを言った。

「お前に何があつたか教えてやるよ。波と雄途にはだまつとけよ。」

坂夜はため息を一回ついて、話し始めた。

「実は、俺百合香のことが好きでさ。告ったんだ。」

坂夜は苦しそうに私に話してくれた。

「で？返事は聞いたの？」

私は坂夜が百合香さんのこと好きなのは知っていたからあんまりびっくりしなかった。

「返事はまだ聞いてない。でも、ずっと隣守つてあげたいって思うんだ。それも好きつてことに入るだろ？」

坂夜は私に聞いてきた。

「入るんじゃない？」

私はちょっと涙目になりながら言った。

「俺はあいつのこと一番わかるんだ。好きな人が俺じゃないこと人も一倍泣き虫つてことも。全部わかつてるんだ。だから…」

坂夜が話している途中に私は話した。

「わかつてない！坂夜はわかつてない。百合香さんのこと波のことも私のことも全部わかつてない！！坂夜は誰よりも何もかも一番わかつてない。百合香さんのずっと仲良しでいたいってことも、波が坂夜のことを追いかけてこの学校に入つたって事も、私の苦しい気持ちの意味も、全部わかつてない！！」

私は思い切って思つてることを言つた。

「？」

坂夜は私に呆然と視線を向けるだけだった。

「坂夜が全部傷つけてるよ……。」

私は泣きながら坂夜に言つた後、坂夜から離れていった。

「全部……。」

坂夜はボソッと言葉を言つた。

「歌。」

雄途が田の前に立つていた。

「歌、俺じゃ、だめ？」

雄途は私をやさしく抱きしめてくれた。

その雄途の腕の中はとても心地よくて暖かくて大きくて、まさに私の必要としている場だった。

私は何がしたいのか。

よくわからないよ。

私はどうしてあなたを好きになったのかな?ねえ、
坂夜。

君に捧ぐ歌第一部（後書き）

どうでしたでしょうか？楽しんでいただけてくれたでしょうか。
次の第三部で最終話なのでぜひ、見てください。

君に捧ぐ歌 第二部（前書き）

いよいよ最終話です。

最後まで読んでいただきとてもうれしいです。

最後までゆっくり楽しみながら読んでいただけたらいいなと想っています。

5、必要とするもの。

「歌は何がしたいの？坂夜を手に入れたいの？それともこのまま笑つてバンドをしていいの？歌は何がしたい？」

雄途が私をやさしく抱きしめたまま、私の耳元に囁いた。
その声はとても優しくてちゅうだけ寂しそうな声だった。

「とつあえず座ろう？」

雄途は私の背中に回つている腕を放しながら座った。

「歌は恋で自分の幸せと人の幸せどちらを選ぶ？」

雄途はやさしく私に聞いてきた。

「？」

私は首をかしげながら考えた。

「たとえば、誰かに告白されたとして、その人のことを好きじゃないとする。断るか、つきあうか。歌はどうか？」

雄途は私に聞いた。

「わかんない。」

私はうつむきながら言った。

「もし、断つたら、相手のほうがかわいそう。でも、好きでもないのにつきあいたくない。でも、つきあつたらいい人だつたとか何かいいことを知れるかもしないよね？」

雄途は私の顔を覗き込みながら私に言つてきた。

「クン…。

私は首を小さくうなずいた。

「みんなその気持ちなんだよ？坂夜も波も歌も僕も。みんなその気持ち。はつきり好きって

言いたい、でも、言つたら相手が苦しいかもしない。みんなそんな気持ちなんだ。坂夜だけをせめるのはいけない。わかるかい？」

雄途は本当にすごい。

私の苦しい気持ちがわかるんだもん。

「恋つていうのは本当に難しいよ。でも、もしかしたらハッピーハンドだつてあるかもしないんだよ？だから、恋ができるつていいと思うよ僕は。」

雄途は私の涙目の顔を覗き込みながら言つてくれた。

「だから、決してあきらめたりなげたりするのほしないでほしい。」

雄途はそういって立ち上がり、私に手を差し伸べた。

「わかった。」

私は涙をふいて雄途の手をかりて立ち上がった。

「ありがとう、元気が出た。」

私は笑って雄途にお礼を言った。

「うん。わ、むごう。波と坂夜も呼んでこよ。」

雄途は私に優しく言つてくれた。

「うん。」

私と雄途はそう言つてさつきの公園に戻つた。

そして、見つめ合つた。

坂夜と波がキスしているところを……。

そのときに思った、波も坂夜を必要として私も坂夜を必要としてるんだつてことを……。

「坂夜……あなたは……あなたは百合香さんが好きなんじゃないの……！」

？」

私は思わず言ってしまった。

「どうして波とキスなんかしてんのよ。最低……最低だよ……。」

私はそういうて座り込んだ。

「ちがうの歌、あたしが勝手にしただけだから。大丈夫、坂夜からしたんじゃないから。」

パンツ

私は思いつきり波の頬を叩いた。

「波は応援してくれてたんじゃなかつたの？今頃何よ坂夜が好きつて。どうして、どうしてあのときに戸つてくれなかつたの？波、ひどいよ。」

私は波に言つて離れて行つた。

「俺、今日は災難な日だな。歌には怒られるわ、波にはキスされるわ。」

坂夜は頭をかきながら言つた。

「あたしは坂夜をなぐさめようとして、キスしたんだよ……。」

波は怒つたよつに坂夜に言い放つた。

「キスはやつこつふつて使つもんじゃねえよ。」

坂夜はさう言つて公園から出て行つた。

「このチームバンドビーツなるんだるつなー。先が思いやられるねー。
波。」

雄途は波に優しく言つた。

「うん、本当にどうなるんだるうね。あの話のときに坂夜が好きって言つとけばよかつたなー。歌に。」

波はいつのまにか赤くなつていた空を見上げながら悲しそうに言つた。

6、君といつ存在。

翌日……。

私はいやいや学校に向かつた。

そして、あつといつまに部室の前。

ガチャツ

「おはよー。」

私は部屋に入りボソッと言つた。

「おっはー、歌。」

波は元気よく私にあこせつけてくれた。

「波、昨日は『めんね。』

私は波に小やこ声であやまつた。

「ううん、全然、私が言わなかつたのが悪いんだし。『うかうか』めん。」

波はやせしく私に言つてくれた。

「これからは、何でも相談して何もかも相談にのる。約束。」

波は私に小指を差し出した。

「うん。」

私は波の小指に小指をかけた。

小さじこじれをちょっとと思い出す、微笑ましい瞬間だった。

ガチャツ

部屋のドアが開いた。

そして、開いたドアから出てきたのは坂夜。

「おっはー。坂夜。」

波は坂夜に元気よくあいさつした。

「……。」

坂夜は黙っていた。

その顔はとても苦しそうで今にも泣き倒れそうなくらいの顔だった。

「坂夜、どうしたの？」

私は恐る恐る坂夜に聞いた。

「振られた。」

坂夜はそういうて部屋のソファにもたれながら泣き顔を隠した。

泣いてるのなんてわかるよ。

それほど百合香さんを好きだったってことも私はわかるよ。

人一倍あなたを好きなんだから。

「坂夜。私ね、人をはじめて好きになったの。でも、それはかなわない恋かもしれない。でも、その少しでもかなう可能性がある恋はあきらめちゃいけないんだよ。」

私は雄途から教わったことを坂夜に教えた。

「は？」

坂夜は涙目で私の顔を見てきた。

「坂夜はまだ本当に人を愛してないよ。だから、こここの場所にいるんだよ？もし、坂夜があきらめるために百合香さんに告白したのならきつちりけじめをつけて、また違う恋をさせばいい。あきらめないでがんばって振り向かせたいのならアタックしていく。そのどつちかしかないんだよ？結局はもう昨日の自分じやないんだから一歩ずつ進んでいかなくちゃ。」

私はいつのまに田から零れ落ちる涙拭いながら坂夜に言った。

「ありがとう。歌。でも、俺、あきらめる。もつ自分の気持ちに気がついたから。」

坂夜は涙目で私に微笑みながら言った。

「自分の気持ち？」

私は涙拭いながら坂夜に聞いた。

「百合香にも一回会つてけじめつけてくる。それで、自分の気持ちをお前に伝える。」

坂夜は涙目から輝く目に変えた。

「ちょっと逢いに行つてくれる。」

坂夜は笑顔で部屋を出て行つた。

私はそのときふつと、頭の中に詩がよぎつた。

こんな詩。

題名…君に捧ぐ歌

詩

愛する人に送る歌

ずっとあなたを見ていたのにあなたはわかつていない

そのきずかないあなたにこの歌を送ります

好きなことを隠し、笑いながら進む道で君は僕のほうをむき一いつ
ツと笑う

その顔が僕は好きなんだ。

愛してるって、何で言えないのかな?

どうして、好きって言えないのかな?

どうして、小さこ頃に言えたことが言えなくなるのかな?

一生この言葉と歩んでく道で試練なのかな?

あなたの笑顔が見たいだけじゃ いけないのかな？

「このくらこの詩が頭によぎった。

「この詩は今の私のようどとも私はうれしかった。

私はこの詩を手直しして、発表会で歌うこととした。

大好きな人を思つ気持ちもとみんな変わらないと思つんだ。

みんな精一杯人を愛しているんだ。

私もがんばんなきや。

ガチヤン。

ドアが開いたそして、入ってきたのは坂夜だつた。

「はあ、はあ、はあ、俺、歌が好きだ。」

坂夜は息を切らしながら突然私に言つてきた。

「いきなり何言い出すの？坂夜。あなたは百合香さんが好きなんじやないの？」

私は驚き氣味に聞き返した。

「俺、昨日すつ」」」考えたんだ。俺本当に百合香のこと好きだつた

のかな？つてずっと。その

ときには歌が言つてくれたことでわかつた。誰もかも傷つけちゃつて
たんだなつてだから俺が本当に好きだったのは歌、お前なんだよ。」

坂夜はズルいよ。

そんなかつこよべきめないでよ。

そう思いながら、目から頬を伝つ涙は何よりもうれしい気持ちを
あらわしたものだつた。

「私も好きだつたんだ。」

私は泣きながら坂夜に言つた。

「坂夜、私書いたんだよ？愛する人への歌。」

私はそつ言つて坂夜に渡した。

私のせつきの揺れてた心。

「本当は雄途つて歌が好きだつたでしょ？」

波は坂夜と歌にわからないぐらこ小さい声で言つた。

「ああ、でも、いいんだ。歌が笑つてくれれば、僕はそれで幸せ
だから。」

雄途はちよつと寂しそうに坂夜と歌をながめながら言った。

「じゃあ、私達もつきあつ？」

波が言った。

「そうだね。」

雄途は笑つていった。

こつまでも、あなたを思い続けるよ。

あなたに捧げるよ。

この歌を。

マイ メロディ
my melody

君に捧ぐ歌 第二部（後書き）

最後まで読んでいただきまことにありがとうございました。
この小説を書きたいなと思ったのは歌を歌つてたときに好きな人の
ことを詩に書いた歌を歌つてたから私も書いてみたいと思ったから
です。

えらそうなことを書いてもうしわけありません。

字や言葉、まちがつてたところもあつたかもしませんが。最後まで
読んでいただきまことにありがとうございました！
できるだけ感想・評価も書いていただきたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7392d/>

君に捧ぐ歌

2010年10月20日12時20分発行